

# 西宗要を中心としての考察

小林 瑞 淨

立宗の宣言——立宗の基礎——聖問の力説

道光の異説——白辨上人の意見——經歷和上の意見

所論の比較——特殊的考察

## 立宗の宣言

宗祖の選擇集御製作は立宗の宣言と視る事ができる、第一章私譯段の始めに今此淨土宗は道綽禪師の意に據らば二門を立て、一切を攝す云ひ、更に淨土宗と號するは何の證據ありやとの疑問を掲げ、それを説明するに元曉の遊心案道に於ける淨土宗の意に本爲凡夫兼爲聖人の文、其外慈愍の西方要訣、迦才の淨土論を引て證明せられてある。勅傳第六に「上人或時かたりてのたまはく、われ淨土宗をたつる心は凡夫の報土にむまるゝ事をしめさんがためなり、もし別の宗を立てずば凡夫報土に生ずる義もかくれ、本願の不思議もあらはれがたきなり」と由是觀之、宗祖に立宗の宣言ありしは一點疑ふべき餘地はない。然るに導師に於ては現存の著述を通じて、其宣言に關する伏憑を求むることは困難である。されど從來の成佛法と全然其轍を殊にせる、往生法を主唱せられたのであるから、事實上其宣言ありしと同様である。所謂淨影嘉祥天台等の諸師は、出離生死の徑路は萬善萬行を累積して遂に成佛に到る、唯在るものは斯の一道のみ

である。其積功累説の容易ならざるが爲め、内外の誘惑を恐れ、或は禪に走り或は彌陀念佛に趣きて、成佛理想を實現せんとしたのであつて、彼等は成佛法に往生法―自力教に他力教―解脱の宗教に救済の宗教―智惠宗教に慈悲の宗教―聖者の宗教に人間の宗教との根本的相違を認めず、否かゝる相違あるを知らぬのである、然るに吾が淨土教正系血脈の諸師は爾らず。この根本の相違點を明かにしたのであるが、特に其往生法の眞價を發揮せられたのが、吾が高祖善導である。それ故鎮西は徹選擇集下卷に「善導宗の意は萬法中に於て名號の一法を以て念佛に名く」と云ひ又西宗要の開卷第一に、「善導和尚の意淨土宗を立て、往生極樂の行を明し給へり」と述べられてある。

## 立教の基礎

然らば導師は何を立教の基礎とせられたのであるか、夫れは西宗要に明示せられてあるが、それを説明する前に本書の性質を一言せねばならぬ。本宗要は鎮西八ヶ年の間、宗祖に就きて淨土の章疏を研究せられたる時、時々不審を記し題を擧て問はれ、それに對する師の一々の仰せを口筆せられ、積みて八十題となりしもの則ち之であれば、大體文中の法門は宗祖の口傳より成る。されば良曉は「本集は當流秘藏の書なり、たゞひ一門たりとも他見に及ぶべからざる者なり」と云ひ、酉師は「此鈔相傳せざれば大旨の深意を知るべからず」と記されてある。要するに宗祖より直接稟承せるものであつて、白骨に留むる血脈、耳底に残る口傳、皆本書中に在り云つて可なりである。かく大切なる本集八十題の中第一が淨土三部經の事、第二が淨土論の事、第三が一向專修の事となつて居る、第一題に淨土三部經の事を論ぜられしは、之に由りて吾が立宗の基礎を明かにせんが爲めである、第二題の淨土論の下に三心と五念との關係を釋して、吾宗の心行不離の行門即ち實踐法を示し、第三題に於て觀經疏に依り、行門廣しと雖も如來の本意によれば、一向專修を以て一宗の元意となす旨を評論せられてある。乃ち本書に於ては開卷劈頭に於て先づ立宗の基礎が論ぜられてあるの

である、其叙述を見るに、始めに導師が多くの淨土教に關する大乘聖典中、特に三部經を採擇せられた事由を述べ、次に有縁の經なるが故に相傳の教なるが故に三昧發得の故にこの三理由を擧て、特に三部經中觀經に據る所以を示し、新たに觀經一部始終の文に依りて淨土宗を建つるか、將た一文一句に就てこの宗を立つるかの疑問を擧げ、總じて云ふときは觀經一部の文に依り、別して云ふときは三心中の深心の文に付て之を立つと答へ、更に「導師の御意は深心の一句に觀經一部を收むる意なり、されば一向專修のみだの名號、之を信じて疑を留むることなく、決定往生せしめんが爲めに、深心より念佛の一行を釋出し給ふなり、之に依りて就行立信と釋し給へるは、念佛の行に就て深心を以て之を行じ疑を拂つて往生を遂ぐべしと云ふ事なり、」と相傳せられてある。この鎮西への宗祖の口傳によれば、導師は深心！深信！吾等の絶對歸依の宗教的情操を、立教の基礎とせられたことは明了である。

## 聖問の力説

如上の西宗要の主張を組織的に力説せるは則ち問師である、十八通教相第一重に、上に掲げたる西宗要の文を引き、實に左の如く論ぜられてある、「此相傳は釋迦如來は但四字を以て淨土宗を説き給ふ、謂く二者深心の文なり、光明大師は十一字を以て淨土宗を釋成し給ふ、謂く言深心者即是深之心也の釋なり、この如來の四字、大師の十一字、但一字に結歸す、所謂順彼佛願故の故の字これなり、之は上人の所得なり、然則、大師は經の二者深心の四字に依て淨土一宗を釋出し、上人は釋の故の一字を得て念佛の一行を選択す、三國相傳の宗義の源、二者深心の一句に依る、豈管、大師上人のみならずや玄忠西河も亦同じく三信三不を立て、前後の二心を釋せざるは意ろ要中の要に依るなり、謂ふ所の三信三不は天親の我一心を釋す、論の十六章の初に亦起觀生信門を立て、五會門の行を開出す、故に知らんぬ、流支玄忠西河光明吉水但二者深心の四字に依て淨土宗を立つるなり」と師は更に十八通の裏書の初に左の如く要約せられてある。

總依一代別三經

總依三經別一經

總依一經別十六

總依十六別一句

總依一句別一字

斯依一字立真宗

具一字者深信心

諸佛已證生本覺

又教相第二重の終りに十宗に約して解信因果の四句を作り、淨土宗は解信の大信の宗教にして、最高の地位を占むる所以を明す。要點を圖示せば左の如し

解、解、因分、因分、宗教——俱舍成實戒律三宗——

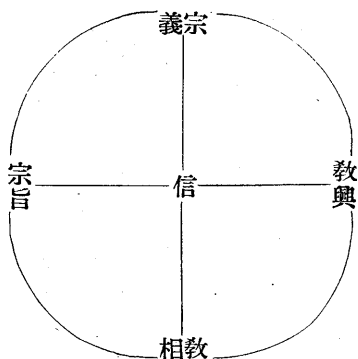
解、信、因分、果分、宗教——法相三論二宗——

信、解、果分、因分、宗教——華嚴天台真言佛心五宗——

——解、宗教（因分可說宗）

信、信、果分、果分、宗教——淨土宗——單信、大信——信、宗教（果分不可說宗）

教相第十重の終りには一宗の教興教相宗旨宗義、皆悉く信を基礎とし、總て之より開展せる由を左の如く圖示せらる。



斯く阿師は此點を力説せらるゝのであるから、授手印三十七個條口傳の第十二に「淨土宗とは二字に習ひ極むるなり安

心の一字(信)起行の一字(故)なり亦極めては一字(信)なり」この一口傳を設けられてある。師の所説は源と西宗要の指南に據られたもので、西宗要は前述の如く宗祖の口傳なれば、之れ全く宗祖の御高見に基くもの云ふべきである。

然るに『勅傳第六』等に示すが如く、宗祖は導師の一心専念の文に依りて、開宗せられたるは一點疑ふべきでない、而して此文は故の一字に結歸すれば、導師の信を立教の基礎とせられたの相違するが如く思はるゝのであるが、決して爾らず。「一心専念」の文は就行立信に就きての釋なり。故に宗祖は所信の起行につきて故の一字に依り、導師は能信の安心につきて教を立てられたのである。能信と所信—安心と起行は本來不離の關係を有すれば、結局一致に歸するのである。唯方面立場を異にするに過ぎないのである。さればこそ、鎮西が『西宗要』に記載された如く、宗祖も安心の方面よりせば信の一字を立教の基礎とする事、導師も其揆を一にするのである。要するに他の大乘教にては信じて解を生じ、解によりて證を得る事を教ふるも、吾が兩祖の主張は信じて解に亘らず、所謂無觀無解單信口稱の得道を説くのであれば、眞に是れ格外の宗風であつて、亦最もよく宗教の本質を發揮せるもの言へやう、其點は且らく後に譲り更に進で立教の基礎に關する異説につきて考察しやう。

### 道光の異説

望西樓道光は『選擇大綱抄』に第十二附屬章を釋して曰く「淨土宗に於て宗義を立つるは、源と當章の經及釋文に依る、眞に是れ甚深なり、聊爾にすべからず、傳へ聞く、黒谷上人月輪禪定殿下に參向の時、住山の者ありて集會せり問て云く、いかなる經釋に付て淨土宗を立つるや、答て曰く附屬の文に付て之を立つと、又問て云く何ぞ但一文によりて宗義を立つるや、爾時上人微笑してもの言はず、問者歸山して實地房の法印に語て云く、法然房返答に及ばずと、法印云く彼の聖人の言はざるは、不足の言に處する故なりと、之を以て之を案するに宗義の成立するこ此文に在り」と主

唱し全然兩祖の所説こそその趣を殊にして居る、之に關して三緣山の碩學白辨上人及經歷和上の意見をこゝに紹介せむ。

## 白辨上人の意見

道光は然阿上人の門徒に於て、學解優長の人にして著述又少なからず、されど其書を視るに師意に背くこと多し、之を以て知る、今の主唱も亦相傳を得ずして胸臆の説をなすか、蓋し彼は此大切なる『西宗要』を傳へざるが故である。上人の所得「一心專念」の文なる事明かなり、何ぞ附屬の經釋に依るに執せんや、但し山僧に對する御答は是れ無方適時の會釋なり。何となれば宗祖の在世、餘行を捨て偏に念佛を勧め給ふが故に、他宗、瞋をなす事少なからず、之を以て彼の山僧も恐らく心中憤りを結んで、專修の法門を破壊せんことを欲す、宗祖密かに之を知り給へば、若し所得の文を以て答へんが、彼れ恐らくは之を信せず、却て毀謗を致さん、「一心專念」の文は善導の自釋にして經說にあらず信するに足らず、此毀謗あるが故に、附屬の經釋を引て「專念宗」を立つること、胸臆の私義にあらず、佛說祖釋其文顯著なるを述べられたのである。山僧尙ほ解せず妄難を加へたるが故に、微笑して止め給ふも、若し相當の人ありて此經釋をも強て拒めりせば、宗祖は委しく二尊の本意、偏に念佛にあることを説き、強く專念の宗義を主張せられた筈である。故に『選擇集』に附屬の文を釋して「當に知るべし隨他の前には且らく定散の門を開くこと雖も、隨自の後には還て定散の門を閉づ、一たび開て以後永く閉ぢざるものは唯念佛の一門なり、彌陀の本願、釋尊の附屬意ること、に在り」を仰せられてある。要するに此選擇の文及第十二章は、之は是れ立宗の上に来たる元意を述べられたるものである、一流の相傳に如來の本意を述ぶるに即ち三種あり。

(十八通教相第六重)  
撰擇口傳口筆

第一種 一 聖道隨他意淨土隨自意語  
二 定善隨他意散善隨自意語

三 散善隨他意念佛隨自意語

第二種 一 定善隨他意語

二 散善隨自他意語  
三 念佛隨自意語

第三種 一 定善隨他意語——致請

二 上六品雜行隨他意語——非本願  
三 下三品念佛隨自意語——本願行

この三種の三重相傳の意によれば、選擇第十二章段は則ち其孰れもの第三重の意なり。當に知るべし、三重の料簡は皆開宗の上之を論ず、蓮華堂道光はこの相傳を知らず。宗義開出の本源をなすは、甚だ非なり。されば宗祖の山僧に對する御語は、無方適時の答釋に過ぎないのである。

### 經 歷 和 上 の 意 見

經歷和上十譽上人の意見にては、立教の基礎觀經附屬の經釋にありこの望西の主張は、宗祖の表面に於ける御説に過ぎずして、其上に『西宗要』に於ける信を基礎とする内面的眞實の相傳ありしものである。『勅傳』を始め『漢語燈錄』にも、附屬の經釋に依ればこの説を掲ぐれば、宗祖にこの相傳ありしを否定すべきでない。然るに深信を基礎とする

相傳は、『西宗要』のみにありて絶て全く外になし。こゝが鎮西が宗祖の骨髓を得給へる所であつて、吾が白旗流の正統なるこゝ、此の相傳の餘流に無きにて知る事ができるのである。附屬の經釋に依るこの相傳は、抑も第十八願は念佛の本源なり。故に釋迦は彌陀の願意を測りて念佛を附屬す。是れ經の現文なれば何人も許さねばならぬ、山僧は他門の人なれば共許の附屬の文に就て、宗を立つと答へ給ふたのである。而して深心の一句に依るこの相傳は、一層深意を有すれば甚だ信じ難し。乃ち汝好持是語と附屬し給へるは第十八願の念佛なり。その第十八願の念佛を修すれば、定得往生と深く信するが吾が淨土宗なり。されば信の當體が其儘淨土宗なり。觀經一部の當體なり。故に『西宗要』に「善導の御意は深心の一句に觀經を收むる意ろなり」この給ふ。換言せば所信の念佛(起行)を能信の心(安心)に従へて、深心の一句に依りて宗を立つるなり。之を要約して言へば、顯露には附屬の文秘密には深心の一句に依りて、立宗し給ふたのであるから、道光の所論必ずしも謬れるにあらず。

### 所論の比較

白辨上人は宗祖の無方適時の御答へなりとし、道光は『西宗要』無相傳の輩なれば、宗祖の眞意を體得し得ざりしなりとて、極力排斥の態度を採られたのであるが、和上は望西の説をも是認し、顯露と秘密則ち宗祖の表裏の御高見なりと、調和的説明を試みられたのである。されど望西が宗祖の眞髓に徹底せざりしは、兩上人共通の思想である。

### 特殊的考察

兩祖の主張せる一向專修、純信の吾が淨土教は、遠く原始佛教の源より流れ出たるものと見るこゝができる。先人



の所説に依れば、世尊は言ふ迄もなく、純淨なる知見と鞏固なる實行力を以て、修道の要諦とせられたのであるが、亦純信仰即ち理智を離れたる、絶對歸依の信仰の大切なることを教へられたのである。原始佛教の重要な修道要目である、彼の彌陀經に出る五根五力の分類にありても、その初徳として出せるものは則ち信仰であり、又羅漢道に到達せんとする出發點に於ても、隨信行と隨法行を擧げて、信仰によりて進むべき道あることを示し、其他小乘聖典には純信仰の大切なるを説くもの少なからずである。尤もその信仰とは佛陀を中心としての三寶に捧ぐる、純眞の情操を指すのであるが、吾が善導宗の單信の立信の基礎とするは、遂かに源をここに發し、それより開展せるものを見るべきでないか。又他面より考察すれば、吾が立教の基礎は人類の心理的事實の上に立つと云ふことも見へやう。導師の教へ給ひし如く吾等が人生及自己に徹底したる覺醒、即ち人生の不安定と罪惡觀とに目醒めたならば、そこに永遠の生命と眞實の光明とを懐がるゝ、切實なる宗教的要求起るに至るであらふ。この切實なる要求起れば、自らそこに大悲招喚の聲を聞き得るに至るのである、則ち眞の覺醒は切實なる要求を生じ、切實なる要求は熱烈なる信仰を生み、同時に如來の永恒の實在を體驗することが出来る。兩祖の三昧發得の芳躅は明かに之を實證するのである。要するに信仰は得難きにあらず、唯要求が切實でないからである。吾等の熱烈なる信仰は、吾等の生命の爲めなる要求から、必然的に生れ來る心理的事實である。理性は之を否定する權威はない、此心的事實を立信の基礎とし、智慧の宗教の外に信仰によりて救はるべき、眞の宗教を建設せられたのが、我が高祖善導大導であり宗祖大師である。

「西宗要」の内容は豊富にして研究題目八十個條もあれば論すべき事項多々あるが今は其内最も重要な始の三題を中心として此文を綴つたのである。